

38 下山順一郎訳柴田承桂校補『検尿法』

(明治十四年)及び原著について

会 田 恵

明治期に入り検尿法に関する出版は、『検尿要訣』(大学東校)、『文園雜誌』の「検尿法」(明治六年)、『検尿必携』(石塚左玄著明治九年)、『病牀明鑑』(広瀬元周訳明治八年)と知られているが、これらは何れも内容は前近代的尿検査であり、且つ原著は不明である。

明治十四年(一八八二)下山順一郎纂訳(以下「訳者」)柴田承桂校補の『検尿法』(以下「本書」)は本邦最初の近代科学特に化学技術による系統的検尿法の紹介であり、しかも原著の明らかな出版としては最初のものであった。そして本書が明治初期に大学南校及び東校に学んだ二人の薬学者により紹介されている事も本書の特徴であり、内容には化学分析による記載が多くみられる。

原著は「Anleitung zur Quantitativen und

Quantitativen Analyse des Harns」(Dr.C.Nebauer und Dr.J.Vogel) Wiesbaden であり、初版は一八五四年(安政元年)で、当初は医学研究者のために書かれた。その後、医師、薬剤師、化学者の尿検査の実践的な手引きに改められて、八版も重ねており、四版の英訳本が出ているので、ドイツ以外にも紹介され、かなり普及し版を重ねたものと考えられる。

国内では、原著は本書の出版と同年の一八八一年(八版)版が金沢大学医学部図書館に所蔵されており、寺畑教授の御好意により親しく閲覧する機会をもったが、この原著には「第四高等中学校医学部図書」の印があり、購入は明治二十年四月より明治二十七年八月の間が考えられるとの御教示を戴いている。

本書は明治十四年(一八八二)発行であるから訳出のため原著は恐らく七版と考えられるが、右の八版の原著との比較対比について少しく述べる。

著者は本書の例言によると、「此書ハ独乙国ウキースバーデン化学校教授『ノイバウエル』氏同国『ハルレ』大

学校医学教授『フォーゲル』氏合著検尿法ニ就テ其要点ヲ抄出シ之レニ『グロブベサ子ツツ』氏動物化学分析法ノ一書ヲ参取シテ編成セル者ナリ而シテ其試法等ヲ選択スルハ専ラ編者ノ経験ニ基ツキ最モ實際ニ便宜ナル者ヲ取レリ」と訳者の意図も述べられている。

訳者の下山順一郎は、薬学者であり、嘉永六年（一八五三）愛知県に生れ、明治三年より大学南校に入學、明治十一年東大医学部製薬学科卒業、同十四年東大医学部助教、同十六年より三カ年ドイツ留學、帰国後東大医科大學薬学科教授となりその後薬学化学関係の役職多く本草學にも造詣深かつた。著者には、製薬化学、生薬學、無機化学、有機化学、日本薬局方注解等多数ある。明治四十五年（一九二二）享年六十歳で没している。

校補の柴田承桂は嘉永二年（一八四九）尾張藩医の次男として生れ、養子に入つて柴田姓となり、大学南校に入學し明治四年より三年間ドイツのベルリン大學に留學し、帰国後は大学東校の教授となり、製薬教室を新築している。この教室の第一回卒業生に下山順一郎を教えているのである。柴田は東京及び大阪の司薬場長などを歴任し、

明治十年二十八歳で大学の教授を辭し、その後は翻訳、著書などをつづけ、六十一歳で没している。

本書は、恐らく柴田がドイツより原著を持ち帰り、訳者に訳出を指示したものであろう。

本書の内容には化学用語が多くみられ、新しい訳語など当時としては訳出には苦労が多かつたものと考えられる。目次の分類が原著に比べて分り難く重複している部分もあるが、全体としては理解し易い内容にまとめられている。しかし我が国の明治中期頃には未だ受容には本書の内容は問題が多かつた事は充分考えられ、本書訳出の意図は壯とすべきであるが、本書の増刷はなかつたようである。

原著は、特にドイツを中心に十九世紀に入つて發展した有機化学による分析法を積極的に利用した内容であったが、本邦の十九世紀の医学領域では未だ検査法を實際に利用する産学の体制は当然みられず、本書の当時での評価、反響などは殆ど書かれていないのである。

（新潟県柏崎市）